

[シリーズ]

PISA型読解力 について考える

第2回

4・5月号では、PISAの測る学力が、知識の習得だけでなく活用、課題解決力に重点を置き、その力は、「クリティカル・シンキング」や「生きる力」につながる能力であることを紹介した。しかし、日本の学校教

育においてその育成手法は模索段階にある。そこで本号では、先進的にPISA型読解力育成授業に取り組んでいる三重県立津西高等学校の澤口哲弥先生に、PISA型読解力に対する考えと、実践内容についてうかがった。

**論理的思考力や論理的根拠に基づく発言ができる生徒を育てたい
という思いがPISA型読解力と一致
多様な解釈が可能な文芸作品を用いて、PISA型読解力を育成**

三重県立津西高等学校 国語科 澤口哲弥先生

● 生徒の社会的関心の低下に対する危機感が ● PISA型読解力育成の契機に

三重県立津西高等学校では、2007年度、普通科2年生の全クラスで、夏目漱石の『こころ』全6時間を、PISA型読解力を育成する授業として展開した。これは教案からテスト作成まで学年統一の一貫したPISA型対応のプログラムという画期的な取り組みでもあった。現場で中心となったのは、国語科の澤口哲弥先生。これは同校から三重県研修センターに出向中（当時）の岡田恭子先生の研究とのコラボレーションで企画、実践された。

2007年度、澤口先生が担当する普通科（全7クラス）の現代文の授業では、年間を通したほとんどの時間で、PISA型読解力を育成する方法での授業を行った。2008年度はさらにそれを深化した取り組みを実践中。これまでは小説などの文芸分野の作品を教材にしてきたが、今年度は特に、評論や意見文を教材とした「批判的に読む」授業を新たに展開している。

PISA型読解力を育成する授業内容について、澤口先生は「もともとの私の国語教育に対するスタンスに合っていた」と語る。というのも、PISAが始まる10年以上前から澤口先生は、きちんと議論のできる生徒が少ないことや、何につけ素直になり、物事を批判しない生徒が増えたことに強い危機感を持っていたからだ。「先生の板書をノートにとって、それで分かったつもりでいるようでは、本当の力は付かない」と常々生徒にも語ってきた、という。



そこで、まず、思考停止に陥らず、「本当にそうなの？」としつこく疑い、反論していく力を身に付けさせる方策が必要と考えた。学んだ文章を表層的な「分かった」で終わらせず、それを実証できる他の例を考えさせたりすることで、筆者が発信した真意や、社会との関連を見つめさせようと考えたのだ。

澤口先生は、「自分の意見は友だちに、学校に、そして社会に反映される。自分は社会とつながっているという実感を持って欲しいと思った」と当時を振り返る。また、澤口先生は1993年頃から授業や生徒会自治の現場でディベートを使い、生徒の論理的思考力や、発信する技術を育成していた。「ディベートでは、相手を納得させる論理を構築し、相手が反論しそうな個所を予想して理論を補強するといった事前準備が必要不可欠である。大きな枠で物事を捉える力、相手の立場になったらどう論証するかを考えることで育つ相対化力に着目した」「生徒をいい意味で扇動してかなりの論客は輩出しましたね」と当時を回顧する。

そうした取り組みを続ける中、2003年の「PISAショック」が話題となり、澤口先生は、自身の考えと共通するPISA型読解力を知った。折しも三重県総合研修センターの研修で、PISA型読解力育成のための国語教育を推進する国立教育政策研究所の有元秀文先生と出会い、本格的なPISA型読解力育成授業に取り組むことになったのだ。

澤口先生は、PISAが目指しているのは成熟した大人の社

またはそう仕向ける発問が大切でしょうね」(澤口先生)

評論をテキストにする場合は、正確な情報の取り出しが必須である。また、生徒は「教科書に出ている評論は間違っていることは言っていない」と内容をそのまま納得してしまいがちである。納得がいかない点をあぶりだすこと(疑問、質問の重要性)、自分ならそのテーマについてどう考え、発言するか、など「整理の仕方」と「思考・発信のプロセス」を丁寧に教えていくことが大切だと澤口先生は

言う。「私自身、職員会議も、講演会もぼんやりしている場ではありません。納得できないことは必ず質問するようにしています。明快なロジックで攻めますよ」

<資料1> 『こころ』のワークシート

学習プリント1では、教科書本文の内容の確認を行う。学習プリント2以降では、例えば「私とお嬢さんとの結婚話を決めたことに対して賛成か反対かとその理由」(学習プリント2)、「なぜ自殺したのか。そう考えた根拠は」(学習プリント3)など、発問に関するワークシートになっている。

会・人間関係であると捉え、けんかにならずに議論を挑める力の育成、異なる視点を持った者同士が対等な立場で意見を交わす環境づくり、などを目標に積極的に新しい授業方法を試みることにした。

● PISA型読解力育成には
● 多様な解釈が可能なテキストを選択

PISA型読解力育成授業で用いるテキストについては、非連続テキストや、図表やグラフの入ったテキスト、マニュアルのような実生活に必要なテキストなど、いろいろな種類のテキストが考えられる。そうした中、澤口先生は、国語という教科の性格上、あくまで文章を教材とすることにこだわった。フランツ・カフカの小説『掟』、長谷川龍生の詩『ちがう人間ですよ』、筒井康隆の小説『ここに恐竜あり』、安部公房の小説『棒』、上野千鶴子の評論『個性神話のパラドックス』等を教材としてきた。敢えて文芸作品を多く選んだのは、さまざまな読みを可能するには、著者の論旨が明快な評論より、多様な解釈が可能な文芸作品が適していると考えたからだ。

教材はなるべく読後の意見が分かれるものが多い。生徒から多様な意見が出る方がグループでの議論も盛り上がるからである。「答えがあらかじめ決まっていると生徒の興味・関心を引き出すことはできません。生徒は答えが分かった途端に思考を止めてしまいます。自分の考えを探し、テキストにその根拠を求め、論証していく過程が、生徒の興味・関心を喚起するのです」「みんなが賛成するような文章より、賛成反対が半々になるような文章を選定する、

● 生徒個人によるワークシート作成→グループでの討論→
● クラス全体での討論を実施

教材によって異なるが、おおよその授業の流れを紹介しよう。1つの教材につき数時間で授業を行う場合は、まず、1時間目に文章を通読させたあと、ワークシート<資料1><資料2>を用いて情報の取り出しを行う。情報の取り出しについては、ポイントを押さえ、間違った読みを防ぐのが目的だ。ここで情報の取り出しをきちんと行えるかどうか、後日行う解釈に大きく影響する。

2時間目は、前回記入したワークシートの確認作業。このとき澤口先生は、時間がなくともせめてワークシートは隣の生徒のものと交換させた上で、確認作業に入る方がいい、と言う。自分のワークシートだと「適当」に記入してしまう生徒もいるが、隣の生徒のワークシートに記入するとなると、分かりやすく書こうと努力するからだ。何より他者の考えに触れることができるというメリットもある。

3時間目以降は、1時間に1つずつ、解釈に関する発問をする。まず、生徒一人ひとりに、自分の解釈(意見)と、本文中の記述から導き出した、その解釈に対する根拠をワークシートに書かせる。そして、個人で書いたワークシートをもとにグループ内で討論させ、最も説得力がある意見1つに絞らせる。さらに、その意見を板書させ、グループごとに発表し、全体討論につなげていく。このように、個人での作業→グループでの討論→クラス全体での討論という段階を踏むことで、意見交換することの気付きや深まりを生徒が実感できる。生徒同士でうまく討論ができるのかという懸念もあろうが、一人で考える時間をしっかりとる

技 ノート 2007年6月

2年 組 席 名前

発問① 門はずっと開いていたのだろうか。
あなたの答え

その根拠

クラスメートの意見とそれに対するあなたのコメント

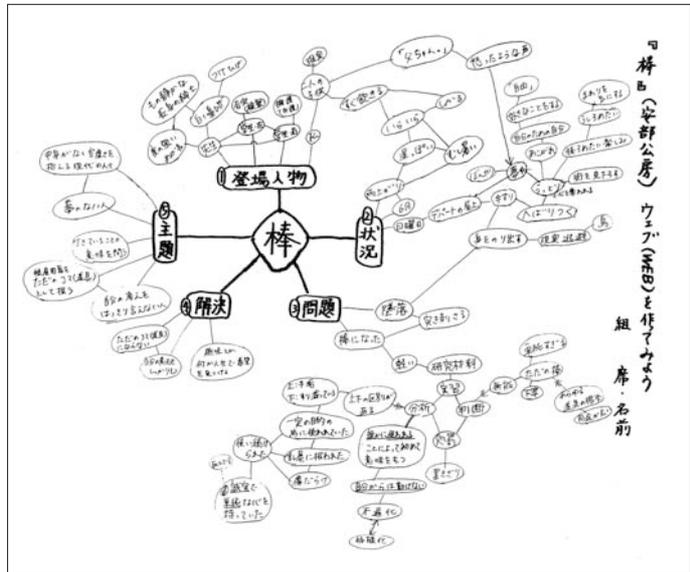
発問② 門に入ることは禁止されていたのか。
あなたの答え

その根拠

クラスメートの意見とそれに対するあなたのコメント

-1-

＜資料3＞ 生徒が作成した『棒』のウェブの例



棒を中心に①登場人物②状況③問題④解決⑤主題に関連する内容を本文から選び出し、関連する言葉をつなげて、作品の構造を理解する。授業のつど、新しい発見を書き加えて作品理解に役立てた。

ワケ目(安部公房) ウェブ(生徒)と作ってみたい
組 席 名前

＜資料2＞ 『掟』のワークシート

発問とそれに対する自分の答え、その根拠となる箇所を記入する欄、コメントの記入欄などがある。『掟』の場合、発問は全部で9つある。発問①②のほか、発問⑧では「この物語の結末はこれで納得がいくか。いかない場合、どう直したいか。あなたの案をまとめてみよう」。発問⑨では「この男のような状況に立たされた経験はあるか。また、それはどんなときか。自らの経験、もしくは考えられる具体的な状況を考え、まとめてみよう」などの質問がある。

ことが討論の活発さにつながると澤口先生は考えている。「討論でイニシアティブをとることができる生徒がほとんどいないような学校では、やり方マニュアルを作っておくといいでしょね」(澤口先生)

なお、最後のクラス全体の討論のときに大切なことは、板書されたどの意見にもOKを出すのではなく、意見の中に論理の矛盾があったり、論理的な詰めが甘かったりした場合には、その旨を指摘することだ。理想は生徒が発見させ指摘させることだが、慣れないうちは教師が指摘すればよい。ただし、答えは1つとは限らないため、根拠がしっかりしており、論理的整合性のあるものは正解として認める旨を伝え、頭ごなしに間違いとすることは避けたい。

最後には必ず「あなただったらどうしますか」「あなただったら結末を変えますか」「筆者の主張に賛成ですか反対ですか」といった答えが1つに決まらない問いに取り組む。その際、必要に応じて、その作品が書かれた背景や、作家の経歴などの知識を生徒に講義することも大切だ。例えば、安部公房の『棒』を扱ったとき、澤口先生は、昭和40年代の高度経済成長時代と、「猛烈社員」という言葉に代表されるような、その時代の会社員の働き方について話をしたという。それを紹介した上で「この作品の『棒』と同じようなものが、今、あなたの身近にあるか」との問いを生徒に投げかけた。生徒は、自分の意見を発信する際「なぜそれを棒と考えたか」の根拠をテキストに求めながら回答した。ある生徒は「外国人労働者」、別の生徒は「非正規雇用労働者」、また別の生徒は「自分自身」を「棒」

と考えて発表した。例えば、この「外国人労働者」という意見に対し「いや、〇〇の側面から見れば外国人労働者は決して棒とは言い切れない」などの反論が出されるなど、議論が深まったクラスもあったという。

なお、PISA型読解力育成授業の「ツール」としては、ワークシート、グループ学習のほか、「ウェブ」＜資料3＞を用いて物語の構造を整理し、理解に役立てている。「これは物語の世界を整理したり分析したりすることや、発想を広げ、つなげていく際の助けになります」と澤口先生は国語教育での活用に意義を見出している。

- 教員がテキストを読み込み、よい発問の作成と
- 議論の交通整理を適切にすることが授業成功の鍵

このようなPISA型読解力育成授業を成功させる鍵として、澤口先生は「発問が最も大切」と語る。

発問作成の主なポイントは3つある。第1に、「従来のテストによくあるような、関連する本文中の棒線部の近くを読めば答えが分かる問いではなく、最初から最後まで何度も読まないと根拠がどこに書いてあるのか分からない発問」、つまり「教科書をべらべらめくる音が聞こえてくるような発問」を考える。第2に、「あなただったらどうするか」と、問題を自分のこととして捉えることのできる発問を行う。「〇〇の心情について話し合ってみよう」と言われても困ってしまう(責任が拡散する)が、「あなたならどうするか」と問われると、逃げ道もなく、自分の考え

を表明しなければならなくなるからだ。第3に、「賛成と反対が拮抗するような発問」が有効である。拮抗するからこそ、生徒たちの議論は白熱する。「ただし、ほとんどの人がそう思い、批判にさらされることのない『常識』（大勢を占める考え）にメスを入れる視点も、PISA型読解力を育成する授業の使命だと考えます。40人の内たった2人の反対意見がきっかけとなって、残り38人の賛成の根拠の甘さが見えてきたりしますから」（澤口先生）

教師が教材とする文章を深く読み込み、生徒の意見や解釈を予想したり、解釈でつまづきそうな点を徹底的に研究したりした上で、文章の本質を突く発問を作成することが重要なのだ。それでも「ときどき生徒から想像できなかった面白い意見が出ると、1本とられたな、と楽しく」と澤口先生は笑う。

発問作成の次に重要なことは、授業中の交通整理である。ここでも、発問作成と同様、生徒からどんな意見や解釈が出るのかと、授業展開を想定しておくことが大切である。

これらの授業の結果、生徒からは「自分とは全く違った意見があることに驚いた」「今までこんなに深く小説を読んだことがなかった」といった感想が聞かれた。また、普段はおとなしい生徒が鋭い意見を述べ、周囲を驚かせる場面も多数見られた。澤口先生は「日頃読書量の多い生徒が活躍しているようだ」と推測する。

PISA型読解力を育成する授業については、グループワークを含むため、通常の授業より時間が不足するのではという懸念もあるが、澤口先生は「この形式の授業は慣れれば時間はかからない」と考えている。というのも、初めこそ、生徒は、自分の考えを探し論証していくことに時間がかかり、教師も発問づくりや授業の交通整理に戸惑ったりする。しかし、授業の準備をしっかり行い、場を踏めば、授業中は生徒が自分で考えたり議論したりするため、教師は通常の授業よりむしろゆとりがあるという。「やっているうちに生徒が授業の進め方を教えてくれますよ」（澤口先生）

グループでの議論も、時間制限なしに行うのではなく、10分、15分などと時間を区切って話し合わせると、生徒は緊張感を持って取り組み、充実した議論を予定時間内に終了させることができる。

なお、定期テスト（『こころ』に関して）では、漢字や熟語の出題のほか、ワークシートに記入した発問と同じ問題を出題した。出題にあたっては、採点の基準「本文中に根拠があるか」「自分の考えが書かれているか」「誰が読んでも分かりやすいように書かれているか」「自分にしか書けない面白い意見が展開されているか」を生徒にあらかじめ提示した。こういったテストは採点も時間がかかるが、「トータル

でPISA型授業を考えた場合、テストで1つの答えを要求する問題を出してしまっただけでは、画竜点睛を欠くどころか、本末転倒になりかねないですからね」と澤口先生は振り返る。

● 生徒が自発的に文章を何度も読み ● 読書の面白さに気付く

1年間PISA型読解力育成の授業に取り組んだ今、澤口先生は国語教育を、「これまで私たちは1つのテキストの細かいところに時間をかけて解説しすぎてきたのかもしれない」と省みる。本授業では、授業時間数が少なくても、生徒たちは発問に促されて自発的に何度も文章を読み、作品を深く理解することができた。『こころ』では「全編を読んでみたい」、『棒』では「安部公房の他の作品も読んでみたい」と言う生徒が何人も出てきて、読書の面白さへの気付きにもつながったと澤口先生は実感している。

公開した『棒』の授業では、数学をはじめ、他教科の教員も多く授業参観に訪れた。澤口先生は、「数学でも、問題文を理解できない生徒が増えているそうです。リテラシーが教科を超えた課題であることの証左でしょうね」と語る。「詐欺被害に遭わないためにも、就職後、上司や同僚、顧客に必要な事項をきちんと説明し理解を得るためにも、そして国際社会では、国際的な問題について諸外国と合意形成をするためにも、また身近に増えつつある外国人とのコミュニケーションのためにも、あらゆる場面で言葉のリテラシー力が求められています。今こそ『国語の出番』だと思っています」（澤口先生）

現在、三重県高等学校国語教育研究会の会長でもある澤口先生は、2008年度の研究テーマに「国際的な読解力を目指して」を設定した。「理想は、生徒たちが自分で課題を発見し、出された意見を自分たちで批評し、課題を解決していくことです。そういう点で完成形はまだまだ先にあります」

今後の研究実践が楽しみである。

三重県立津西高等学校

◇所在地：514-0065 三重県津市河辺町2210-2

◇創立：1974年（昭和49年）

◇学級編成：各学年9クラス（普通科7クラス 国際科学科2クラス）、
総生徒数1,076名（2007年4月現在）

◇特色：三重県の総合選抜制度創設時に創立され、津高校とともに「第2群」を形成して高い進学実績を誇ってきた。1995年度からは単独の普通科の進学校となり、同時に難関国立大学への進学を目指して「語学・人文コース」「自然科学コース」を設置。2000年度からは、両コースを統合して「国際科学科」を設置した。2007年度には、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けた。

現在は国公立大学、中部・関西圏の有名私立大学を中心に多くの卒業生を送り出している。普通科、国際科学科ともに単位制を導入している。